

OPINION
オピニオン・スライス
SHOW

阿川佐和子さん
インタビュー
ビュー





いつか王子様が

父は小説家（阿川弘之氏）でした。大正生まれの父は基本的に男尊女卑の考えが強く、特別に優れた女性は別として、女は家庭に入るのが一番だと信じていたきらいがあります。そんな父は食べるのが好きで「食」に関しては家族に甘かったかもしれません。当時としてはエンゲル係数の高い家庭だったでしょうね。ただ、父の収入は安定していなかったため、本が売れなくなると突然、「おい、明日からもやしの生活をする」と宣言され、家族一同「はい！」と覚悟を決めたものです。不思議と不安はありませんでしたけれど。

父の薫陶よろしく、格別にやりたいこともなかった私は大学を卒業した後、職に就く気はありませんでした。友達が大学に行くので、私も行く。楽しいカレッジ生活を満喫したのち、卒業したら就職せず、きっと

二、三年後には優しい旦那様を見つけてお嫁に行くのだと信じていました。だからお見合いにもずいぶん励みました。でもなかなかその日は訪れませんでした。

怒鳴られ続けた日々

家庭に入るとしても滅私奉公の母のような生き方はできないと思っていたので、結婚後も内職程度の技を身につけておいたほうが人生は楽しくなるだろう。そう考えて好きな編み物と織物の修業を始めました。同時にお見合いも続けていたのですが、これぞと思う運命の出会いがちっとも訪れない。さてどうしたものか。友達はどうも決まってしまうのに、なぜ私だけ結婚できないんだ？ 悩んでいた二十代の終わり、突然、『朝のホットライン』（TBS）というテレビ番組のレポーターの仕事が舞い込みます。その二年後には深夜の情報番組『情報デスク Today』のアシスタントを務めることになりました。引き受けてはみたものの、政治も経済もわからない私なんぞ、きっと三ヶ月ぐらいでクビになるだろう。いつかの社会経験ぐらいに思っていたのですが、なぜかクビにならないまま六年経ちました。でも元がシロウトですからプロ意識が希薄すぎて、



怒られてばかりいました。番組のメインキャスターは、元読売新聞記者の秋元秀雄さんですが、それは仕事に厳しい方でした。六年間、番組で一緒にいましたが、その間、「今日はよくできた」と褒められたのはたった三回だけ。あとはほとんど怒鳴られたり呆れられたりしていた気がします。でも秋元さんには、取材の基本からジャーナリスティックな世の中の見方まで、たくさんを教えていただいて今は感謝しています。当時は怖くて怖くて、さっさと辞めたかったですけれど。

作家にインタビュー

小説家の娘のくせに子供の頃から本を読むのが苦手で、作文を褒められたこともありません。そんな私がなぜかテレビの仕事を始めてもなく、作家にインタビューをするという雑誌の仕事を始めることになりました。インタビューをして、自分でテープ起こしをして、原稿をまとめる。当時は「ゲラ」とか「校正」とか、改行マークすら知らなかったので、担当編集の方に一から教えていただきながら連載を続けました。定期的に文章を書くようになったのは、その仕事が最初です。インタビューも、今思い返すと、とんでもなく下手だったはずですが、「アガワの娘か」ということで許していただいた面もあったでしょう。親の七光りがわずらわしいと思う一方で、親の七光りに甘えていた部分もおおいにあったと思います。

40歳直前でアメリカへ

6年で最初の番組が終了し、続いて『筑紫哲也NEWS23』の第二部のアシスタントを担当することになりました。大阪では私の出演コーナーは放送されていなかったはずですが。生のニュース番組の仕事にはだいぶ慣れてきたのですが、その分、「いったいこの仕事は私に向いているのか？」という疑問が膨らんでいきました。当時、女性ニュースキャスターは花形の仕事でした。若い女性の憧れの的。でも私はシロウトからたまたま始めた延長のまま、さほどのプロ意識も、ましてジャーナリストの自覚もない。安藤優子さんのような気概はないとずっとコンプレックスを抱えていました。ちょうど四十歳を目前にして、ここでスイッチを切り替えないとと思い立ち、番組を降板し、アメリ

カで一年間、生活することを決心します。

別に政治の勉強をしにいくつもりはありませんでした。たまたま（いつも私の人生はたまたままで始まりませんが）、ワシントンのスミソニアン博物館に勤める女性と仲良しになり、「テレビの仕事辞めるなら、ワシントンにいらっしゃいよ」という誘いに乗ったまでのこと。留学というより遊学のような気持でした。

現地ではその友達の紹介で、スミソニアン博物館のボランティアのスタッフとしていくつかの仕事を手伝いました。毎日、生活していれば英語は自然に身につくだろうと思っていましたが、ダメでしたね。いくら本場に行っても努力しなければ喋れるようにはなりません。このお喋りな私がアチラでは「サワコは無口でおとなしい」と言われていたぐらいです。

どこへ行ってもやるのが中途半端。楽しくはあるけれど、このまま歳を重ねていっていいのだろうか、ワシントンでも悩むことは多々ありました。そんなとき、スミソニアンのアメリカ歴史博物館の壁に彫られた言葉が目にとまりました。「どんなハンディキャップを持っていようとも、どんなに背が高かろうと低かろうと、男女の差も人種の違いも関係ない。あらゆる人間には社会と関わる権利と能力がある」という、正確ではないかもしれませんが、そんな言葉です。私はどれほどこの言葉に勇気づけられたことか。今でも落ち込むたびに思い出します。そうか、こんなダメな私にだって社会で必要とされる場所は必ずあるはずだと、思い直すことができるのです。

インタビューの仕事

アメリカから戻り、再開した仕事の一つは、またもやTBSの報道番組『報道特集』のキャスター。そしてもう一つが週刊文春の連載対談の仕事でした。『報道特集』では主にあちこち取材して回ることが多く、特に印象的だったのは、戦争中のボスニアの取材でした。防弾チョッキをつけて砲弾の音が轟く中を取材したときは正直、怖かったです。そんな戦火の街でも淡々と生活している人々を見て、衝撃を覚えました。そして、海を隔てた遠い国にいて、この戦争を口だけで評論することは簡単だが、その国に取材に行ったら、戦争の本質を軽々に理解することは難しいと思い知りました。

『報道特集』のキャスターは1年半で辞めましたが、同時に始めた週刊文春の対談ページは今年で二十六年目に突入します。始めた当初は、インタビューが苦手で、資料読みがつかなくて、とうてい長くは続かないと思っていましたが、人生はわかりませんね。

よく他人様に「インタビューするにあたっていちばん大事なことは？」と聞かれますが、答えるとするれば、それは「一生懸命に相手の話を聞く」こと以外にないと思います。相手の言葉に真摯に耳を傾けて、相手の今の気持を想像し、相手が何を面白がって、何を嫌がっているかを察知する。そうすれば次の疑問は自ずと湧いてきます。そして、面白いときは面白がり、悲しい話のときは、その思いを受け止めて、もし自分に降りかかったことだったときはどう思うかを想像する。いわば、大事なお客様を接待する気持。同時に、この対談を読む読者もお客様であることを忘れないようにする。毎回、上手にいくわけではないですが、根底にはそんなことを心に置きながらインタビューをするようにしています。

男と女の力関係

父の影響かもしれませんが、どちらかという私は殿方に優しい考えの持ち主だと長らく思ってきました。女が男とすべてにおいて同じ仕事をするのは難しい。それは女のほうが劣っているからではなくて、男と女ではもともと造りが違うと思うからです。

女は概して至近距離に意識を向けるのが得意だが、男は遠いところを見るのが上手。女は感情が動けばいくらかでも働くけれど、男は依って立つ場所（たとえば国家とか会社とか）を決めないとなかなか動けない。これは私の偏見かもしれないし、個人差はおおいにあると思います。でも、そういう傾向はあると思います。そもそも生物学的には女のほうが強い。長生きだし。放っておくと男は夢だけ見て、足元にまったく関心を向けない。そうなっては困るので、とりあえず体型や体力からすると優勢である男を立てて、「お父さん、頑張ってください」とおだて、女は一步下がって家庭を守るというシステムを作ったら、だんだん男が威張り始めちゃったような気がします。それが父の時代ですよ。でも最近では体力的にも女は強くなり、仕事の幅も広がって、経済力も持つようになると、だんだん態度も大きくな

ってきた。これもまた、振り子が振られすぎて困ったものです。女も最近、家事と仕事を両立することに疲れてきたんです。男を叱るのをそろそろ止めにし、強くて優しい男にもう少し頼りたいと思っている女性は増えているのではないのでしょうか。「しっかりしてよ！」と女が男を叱ってばかりいるせいかな、最近の男性はどうもびくびくしているように見える。殿方には、嘘でももう少し「俺に任せろ」と言ってもらいたいものです。

たとえば最近のお父さんは、子供を叱ることができないんです。特に娘を怒鳴れない。なぜかと聞いたら、「娘に嫌われたくないから」です。昔のお父さんは子供に嫌われていたけれど、そんなことを気にするより、世間に「あの家の子はどうしようもない」と思われぬために、敢えて厳しくしていたんでしょう。私の父ほど「俺の言うことが聞けないならさっさと出て行け！」なんて怒鳴り散らさなくてもいいけれど、もう少しお父さんには、一家を支えているという気概と自信を持って、家族の前で遅くいてもらいたいと思います。

後悔と反省

専業主婦になることだけを夢見ていた私が、どういう因果か、仕事中心の人生になってしまいました。子供を産んで育てるのが楽しみだったのに、その僥倖にも恵まれず。でも後悔はしていません。途中途中で失敗は山のようにありましたが、その都度、たくさん反省はしてきました。反省は必要だと思いますが、時間を元に戻すことはできない。だから、犯してしまった失敗は、次の機会の糧として、あるいは老後の笑い話の種として、大事に心にしまっておくことにしています。

伝えたいこと

六十歳の半ばになって、若い人たちに伝えるべき教養も知識もほとんどないですが、ただ一つ、アナログ人間から申し送るとしたら、何ごとも、どうか結果だけを見ないで。結果に至るまでのプロセスの中に、教えられ、興奮し、面白いと思えることはたくさんあるということ覚えておいていただきたいです。

（インタビュー：松本 岳、
阿部秀一郎、
西村久美子）